
白い夢

山崎空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い夢

【Nコード】

N1292R

【作者名】

山崎空

【あらすじ】

これは私の夢の話だ。真っ白い部屋のソファに座る、私と、彼の。雪は毎日白い部屋にいる夢を見る。見知らぬ誰かと共用している不可思議な夢を。それはいつまでも代わり映えないまま続くと思っていたが……。例の如く思い付き話です。細かい所は適当です。

いつ頃から、その夢を見だしたのかは覚えていない。只氣がついてたら、その夢は私の日常になっていた。

天井も床も白い部屋。窓は後ろに一つだけ。扉もなく、家具といったら部屋の中央にぽつんとおかれたソファーだけ。

そこに私ともう一人が座っている。

そんな夢をずっと見続けていると友人に話したら、

「同じ夢を見るなんて何か運命的だね」で一蹴された。

彼女には説明しなかった私も悪いのだけれど、別に私が見る夢は同じ夢ではない。

同じなのは白い部屋。天井も床も真っ白な。そして中央に置かれたソファー。色は確か茶色だったと思う。

そして私ともう一人が座ってると言う事、それだけが同じ事。

私達の服装は毎回異なっているし、互いに読んでいる本も又違う。それどころか、座っているソファーの大きさすら違うのだ。それに応じたように、部屋の広さも変わる。

軽く十人ぐらい座れるときもあれば、四人がけぐらいの時もある。基本は私ともう一人の間に、四人座れるぐらい。

私達は互いに隅っこに座って本を読み、顔を上げない。相手の顔も見ない。

分かっているのは相手の性別ぐらいだ。

私と歳がそう変わらない男。ただそれだけ。

自分以外にもう一人座っている存在がいる。

それなのに私は何の違和感も感じず、また相手も感じてないのだ。

ろう、夢の中では互いに隣を見ることはない。

そんな夢を見続ける。

ずっと、もうどのぐらい経つのか分からないほどずっと。

ソファアの隅っこに座り続ける私ともう一人は、まるで鏡に映った虚像と実像のようだった。

* * *

いつもどおり私は夢を見ていた。

窓が一個しかない白い部屋の中で、ソファアの隅っこに座りながら本を読む。気がつくとその体制なので、自分がいつその夢を見始め、また本を読み始めているのかは分からない。

違和感を感じたのは、隣の気配の近さだった。

もう片方のソファアの隅には、いつもどおりもう一人がいた。

距離は信じられないほど近く、間に一人座るのがせいぜいなんじゃないかと言うほど、座るソファアは小さかった。

心なしか部屋も狭くなったように感じる、その日の夢。

窓の外の白い景色も変わらず、私が本を読むのも変わらず、ただ違うのはもう一人の様子と、狭くなったソファア。そして部屋。

もう一人は子供のように膝を抱えて、ソファアの隅っこで丸くなっていた。膝にうずめた顔は、いつものように髪に隠れている。

まるで微動だにしないその様は、人形のように少し怖い。

いつもならページをめくったり、息を吐いたりする音が薄く聞こえると云うのに、今はそれすらもない。

普通に動いているときはあんなにも気にならなかったのに、動かないだけでどうしてこんなに私の思考をひっぱるのだろうか？

気になったものの今更声をかける気にもなれなかった。

なんとなく理解できたのは、横に座る相手が落ち込んでいる事。それぐらい。

小さくなったソファは、一体何を示すのだろう。

隣が気になって本に集中できない。

こんな事はこの夢を見るようになってからまったく初めての事だ。

音を立てないように静かに本を閉じてから、私は改めて隣の男の様子を伺った。

いつもと様子が違うもう一人。

狭くなったソファー！。

近くなった気配と距離。

膝を抱えて丸まるのは、自分を守っているようにも、周りを遮断しているようにも見える。一人になりたい時、心の中の自分はこんな風なんだろうかと思ったら、それがストンとはまったように感じた。

狭くなったソファー！。

私が相手の気配を濃く感じるように、きっと相手も私の存在をいつもよりも強く認識している。それでも彼はただ丸まって微動だにしない。私の存在が邪魔なら、きっとソファーは逆に大きくなっていたはずだ。

以上のことから導き出した結論で、私の次の行動は決まった。

やっぱり思いとどまった方がいいんじゃないかと思っただが、結局私は導き出した結論の通りに動いた。

一度立ち上がって、ソファーに座りなおす。

ただそれだけの行動。

ぐっと近くなった存在は、触れた腕から伝わる体温でいやというほど確認できた。

相手が反応するよりも早く本を開いて、そっぽを向く。けして顔はあわせない。それが多分最善だろうと思った。

予想通り顔を上げたらしい相手が、私のほうを見る気配がした。けれど私は無視を決め込む。ただ、隣にいる事だけを示して彼を『一人』にする。

もう一人はしばらく私を見ていた、様な気がした。でもややしてからまた同じように、膝を抱えて丸くなった。離れる気配はなく、ソファアが広がる事もない。

私は、腕と腕が触れ合う距離を保ちながら、そんな彼の傍にずっと座って本を読み続けた。

* * *

そして次の日の夢。

何事もなかったようにソファアはいつもどおりの大きさ。相手の様子と距離も、又いつもどおり。昨日のは別人だったんじゃないかと、そう思うほど。

彼はソファアの肘掛にもたれかかるようにして分厚い本を読んでいた。

こちらに視線を向けてくることもない。話しかけてくることだっ

て、もちろんない。

時折ページをめくる音が聞こえて、本当にすっかり元通りだと思
う。

これなら私も、気にせずはこの夢をすごす事が出来る。

無意識にほっと息を吐いた。

崩れた均衡は綺麗に修復され、白い夢は変わらずそこにあった。

そして私も、今までと同じように変わらずただ本を読みふけた。

また次の日の夢。

いつものように本を読む私がいて、おかしい事態になっていると気がついたのは情けない事に大分読み進めてからだった。

均衡は、修復されたはずだった。

綺麗に、跡形もなく。

ソファーも元通りの距離で。

そう、昨日は確かにそうだった。

気がついたらすぐ隣にもう一人が座っていた。いつもの端っここではなく、私側のすぐ傍に。ソファーの大きさは元通りのまま。相手との距離だけが一気にゼロになった。そんな感じ。

しかもさつきから視線が突き刺さる。ぐっさぐさと、そりゃもう容赦ない攻めようだ。正直全身に穴が開きそうで困る。

しばらく無視をし続けて、いい加減精神的にも限界になって本を閉じた。

相手の本はずっと閉じられていて、その上に無造作にのせた指は男性らしく骨ばって、でもすらりと長い、綺麗な手だった。

手元を見たのは、やっぱり相手の顔を見上げたくなかったからで。このまま視線が刺さり続けると私いずれ殺されるんじゃないだろうかと思っただから、観念して顔を上げた。

たまに視界の隅に映るだけで、まともに見た事もなかった相手の髪は、黒だと思ってたら実は黒じゃなかった。こげ茶色に見えて、

まったく違う色かもしれない。

適当に切ったのだろう、髪の毛の長さは不ぞろいで、やけに長い前髪の間から、ぼんやりとした黄色が二つ、私を見ていた。

すぐに顔をそらそうと思っていたのに、思いがけない色に思わず凝視してしまう。

黄色。何度見ても黄色だ。

ぼんやりした暖かい黄色。橙。そんな目の色の人間に遭遇した事があるかと言えば答えは否だ。青い目にだって遭遇した事がないのに黄色。

何だその目は、あれか、君ゲームのキャラ？ それともカラコン？

目線ががちりあつた途端、今まで黙って視線を突き刺してきた相手は口を開いた。

「？」

紡がれた言葉は、聴きなれた日本語ではなくて、英語でもない。授業で一年だけとつたドイツ語にも似ていない。

まあとにかく知らない、外国の言葉だった。

夢の中だからなんとなく言葉も分かるような気がしていたので、少し驚いて瞬いた。

そういえば顔立ちも日本人とは違う。鼻が高い。私の低くて丸い鼻をあざ笑うかのような高さだ。

「？」

相手がまた何か言った。さっきとは違う言葉だった。視線は変わらず私の顔をがちり捉えて、離さない。

ここはもう少し奥ゆかしくしてほしい。切実に。

「何を言ってるのか、わからない」

私が口を開くと、今度は相手が瞬いた。

自分と同じ反応に思わず笑う。多分、相手も言葉は当然同じものだと思っただのだ。

私が笑うと相手はますます目を瞬かせた。

彼の長い前髪が、睫に触れてかすかに揺れる。

「……」

少し目を細めて、相手は何か呟いた。なんとなく呆然と、心で呟いたはずが声に出してたと言う感じだった。

「……、シグ。？」

彼は何かを考えるように目を伏せた後、ややして自分を指差してまた何かを言った。そして間をおかず、今度は私を指差して首をか上げた。

残念ながら英語すらまともに聞き取れない私の耳では彼の言葉を完璧にヒアリングするのは難しく、分かったのはシグ、という一部の音だけ。

「シグ」

私が首をひねると、彼はまた自分を指差して何か言った。さつきも出てきた言葉だった。無意識に「シグ？」と繰り返すと、彼は急に破願して何度も頷いて、また言った。

「、シグ。？」

そこでぼん、と何かが閃いた。彼が一体何を言って、何を私に問いかけていたのが本当に急に理解できたのだ。

「私の名前は、セツ、雪よ」

「セツ？」

予想は大当たり。彼は私の名前を何度か呟いて、また笑った。

よく、笑う人だ。

多分それが、今初めて相手に抱いた印象。

自己紹介をしていたと言う事は、多分シグ、と言うのが彼の名だ。その先は私には聞き取れなかったから仕方ない。

彼は何が楽しいのか、また私の名前を繰り返して、今度は自分の持っていた分厚い本を指差した。

「オーヴィル」

その単語がはつきりと聞こえたのは、きっと彼が……シグ、が、ゆっくりと言ってくれたからだろう。

オーヴィル、多分本の事をそう言うのだろう。

精一杯聞いたとおりに発音すると、彼は大きく頷いた。

シグは今度は私の持っている本を指差す。彼の呼んでいる専門書のような装丁の本とは違い、私が読んでいたのはただのハードカバーの小説だった。

「本」

「ホン？」

「そう、本」

頷いてもう一度繰り返すと、彼も頷いた。そして次は自分の髪に
触れて、「カルアブレオ」と言った。

何だか難しそうな発音に、私は四苦八苦しなからそれを復唱する。
結局中途半端な発音になって、シグに笑われた。

今度は私の番だ。

いつの間にかそう思ってしまったている事にびっくりして、でも悪い
気分じゃなかった。

白い夢の中。

いつの間にか私達は、互いに互いの言葉を教える事に夢中になっていた。

それから夢の中で会ったたびに、私達は知らない単語を覚えあった。シグは私の。私は彼の。夢というのは不便かと思えば便利なもので、私が子供の頃買ってもらって、いまだに持っている道具を絵で紹介した図鑑は、夢の中にも持ってこれた。というか、あの本が今欲しいなと思ったら手元にあったのだ。

この本はシグに好評で、私達の教えあいつこはとどまる事を知らず、ついに会話にまでたどりついた。

といつても私は単語と単語をただつなぎ合わせただけのカタコト。滑らかに会話出来るようになったのはシグだけだった。

* * *

シグの仕事は「エルイヒ・アイギア」というらしい。

正直何の職業かさっぱりわからない。

本を読んで、調べ物をしたり実験したりするのが主だといつから、研究者みたいなものなんだろう。と勝手に解釈した。

今研究しているのは「ルマニヤ」について。

これまたよく分からない単語なのだけど、シグは実に簡単に説明してくれた。ようは何かを呼び出す方法だと。

何かって、何を？

問いかければ、まだ決まっていないという答え。

最近は研究に没頭しすぎて、夢の中で私に会う以外、殆ど人と会っていないと言う。

うん、どこにでもいるんだなこの手の人間は。

一方私かというと、所詮しがない雇われ社員という奴だ。以前まで出ていた残業代が、最近の不景気にあおられて出なくなったのをぶつぶう言ってる、何の変哲もない一般市民である。残業も減ったが給料も減った。まったく死活問題だ。

お金がないというと、彼は金に困った事はないなとさりりといった。言いやがった。ちよつと殺意が沸いたのは仕方ない事だと思う。

白い夢の中の、私ともう一人。私とシグ。

部屋も窓もソファも、何一つ変わりはなくただ関係だけがゆっくり変わっていった。

ソファの端と端に座っていたのが幻だったんじゃないかというほど、私とシグは近づいて座って色んな話をした。

互いが持っていた本はソファの両端に置きっぱなしのまま。時々思い出したように手にとって、読めるかどうか試してみる。シグの持つ本は分厚くて、いかにも研究所といった風体で遊びの欠片もない。どこが面白いのかと聞けば、楽しいかどうかよりも参考になると返ってきた。

どんな内容なのかは気になるけれど、私の語学能力ではまだ本を

読むには残念ながら至らない。

逆にシグはスポンジが水を吸い込むのごとく、私の言葉を覚えていった。天才ってきつとシグみたいな人の事を言うのだと思う。

私達は気安い友人のように、隣に座って話し、時に静かに本を読んだ。

四人分だった隙間は、今は一人分もない。手を伸ばせば触れられる、だけど伸ばせなければ触れられない。そんな微妙な距離を保ち続けている。

まるで今の私の心のようだと思うと、その心地よい夢の空間が、少しだけ憂鬱になった。

白い夢は私にとって確かに夢だった。

いつの間にか終わりが来れば、目が覚めて朝が来ている。

部屋には私一人きりで、もちろん天井も床も壁も全て見知ったもの。白いあの部屋ではない。棚には買った本がばらばらに並んでいて、図鑑から辞書から小説から、一緒くたに全部積み上げてある。

夢の中でシグに見せた図鑑や本も、多分その山のどこかに埋もれていて長らく日の目をみていない。

朝起きれば私は白い夢がやっぱり夢のままである事に落胆する。

…いつからだろう、そうなったのは。

きっかけはシグと話すようになってからだ。それはだけは確かだった。

私とシグは、夢の中でしか会わない。

夢が終われば朝が来て、一日が終われば夢で会う。

私達は、現実では絶対に会えない。最近ではそう思うようになっていた。

彼は多分、私が知っている現実にはいない。もしかしたら私が作り出した願望の産物なのかもしれない。最初からいない、幻。

そう思うのは、きつとシグが私に優しいからだ。優しすぎるからだ。

全てが自分に都合よく出来ている幻としか思えない。

最初の無関心振りが嘘のように私達は仲がよくなったし、シグは優しい。

その優しさが体の内側をじわじわ侵食していくたびに、私は現実に戻りたくないと思ってしまう。

現実には彼はいない。それが寂しい。

どこでどう間違えてこんな風になってしまったのか、私は今の自分がとても嫌いだった。いつか白い夢が完全に終わってしまう事に怯えて、あの時あしななければ良かったと後悔する自分が嫌いだ。

膝を抱えていたシグの傍に行かなければ、きっと私達は交わらない平行線の上に座り続けていただろう。優しいシグはいない。そこにいたのは空気のような「誰か」の存在。

後悔するのは昔から嫌いだった。

後悔するたびに嫌な気分が増えていって、気分が悪くなるからだ。だから何を選んでも、間違っても、後悔しないで生きようと決めた。でもそれはうまくいかないまま、また私は後悔してる。

後悔し始めると、急激に周りを遮断したくなる。

一人になりたくて、でも誰かに傍にいて欲しくて。やっぱり一人になりたい。

ああ、あの時のシグはこんな気分だったのだろうかと思ったたら、何でかますます会いたくなってしまっただけで困った。

* * *

白い夢。

いつもどおりの、白い白い空間。部屋。

いつの間に眠ったのだろうか？

仕事場から帰ってきて、靴を脱いだ記憶はある。気分が悪くて水を飲んで、それからどうしたか忘れてしまった。

私は何故かいつかのシグみたいに、膝を抱えて丸まっていた。ソファアの隅っこに埋もれるように。少し顔を上げると、白い部屋の中に私は一人きりだった。

ソファアの大きさはいつもより大きくて、部屋も心なしか広く感じた。

横には十人ぐらい座れるスペースが開いていて、シグはまだいなかった。

相手がいない事を認識するのはこれが初めてかもしれない。

胸の奥が締め付けられるように痛い。かと思えばざわざわと胸騒ぎがする。

叫びだしたいような、縮こまって石になってしまいたいようなそんな不安定な感覚。

気持ちが悪くそれは仕事からだった。夢の中ぐらい、逃れられてもいいじゃないかと思う。

けれど実際は夢の中の方が、私の胸騒ぎは大きくなる。

シグが存在する場所だからだ。原因がもうすぐ現れるかもしれないのに、おさまるわけがない。

広い広い白い部屋。

大きなソファアールに一人きり。

膝を抱えて丸まって、目をつぶっているのは寂しい。でも少し気分が軽くなる。

何も考えずに頭も真っ白にして、シグのことも考えないようにして、心まで真っ白になって冷たくなったら、きっと気分はもっと良くなる。

一人きりは寂しい。

でも一人きりはとても楽で、安心できる。

誰かに一人にされる心配がないから、最初から一人ならこの先もずっと我慢できる。

落胆もなければ、もしも、なんて希望も抱かないだろう。

だからもっとひとりになればいい。

もっと、もっと、もっと。

そのぬくもりを感じた途端、ピシリ、とどこかで音がした。

片側の腕に、じんわりと暖かい体温があった、

夢の中でも確かに暖かいと感じるそれは私以外の誰かの体温。

反射的に顔を上げて、隣を見た。予想通りの人を見つけて、またピシリ、と音がした。

私が顔を上げたことに気がついたのか、シグは読んでいた本から顔をあげて私を見た。

いつかのように真っ直ぐな視線で私の顔を見て、彼は読んでいた本を静かに閉じる。

ピシリ、とまた音がする。

ピシリ、ピシリ。何かが壊れる音が立て続けに私の中に響く。

何の音なのか自分もよくわからない。

ただ音は止まらず、ピシリ、と私の中に響いていく。

私は多分、強張った顔をして、震えていたのだろう。増していくその何かの音に。隣にあるシグの体温に。

その場から走って逃げ出したかった。

でも私は膝を抱えて隅っこで固まるだけ。シグから視線を逸らす事もできず、息を吸うのさえ苦しくて震えていた。声を出したら涙まで出てきそうで、何だか怖くて声をだせなかった。

シグが膝を抱えて丸まっていた時と、まったく逆の立場で。でも状況はまったく違う。

いつの間にか部屋は更に大きくなっていて、ソファアの長さはありえないほど横に伸びていた。

もう片方の隅っこはすっかり離れてしまつて、今なら二十人ぐらい座れるかもしれない。それなのにシグは私の隣にいた。

隙間もないくらいぴったり隣に。

本を読むのを止めた彼は、震える私の肩を気遣うように抱きしめた。

ピシリ、ピシリ、ピシリ…。

壊れる、壊れる。

私の中で私が叫ぶ。

実際の私は引きつったように息を吸っただけだった。

壊れる、壊れるよ！

取り返しの付かない事につ

声が叫び終わるよりも早く、何かは最後の音を立ててカシャリと崩れた。予想したよりも静かだ。いっそ穏やかに壊れ、粉々になって消えた。

「セツ」

シグが私を呼んだ。

ポロリと涙がこぼれた。

この時ほど、名前を呼んで欲しくないと考えた事はなかった。呼ばないで欲しかった。ほつっておいて欲しかった。できれば今

日は、会いたくなかった。(でも会いたかった)

一人きりになりたかった。一人きりでいたかった。せめて今日だけは。完全に心が冷えてしまうまで、楽になるまで、蓋をして鍵をかけて、心の底で凍らせてしまうまで。

だからこんな部屋を広くして、ソファの端を遠くに追いやってたのに。

シグは隣にいる。

私のすぐ隣に、隙間もないくらいぴったりと、私の肩を抱いて。

「セツ」

もう一度、名を呼ばれる。

彼の声はとても優しい。だから辛い。耐えられなくなって顔を膝にうずめた。ようやく視線を逸らせて少しだけ心は楽になったけど、私はまだ震えていた。ぎゅっと両腕に強く力をこめて、自分以外を遮断しようとした。

「
」

シグは何かを言った。言葉は教えてもらった事のないもので、生憎理解できなかつたけれど、どこか懇願するような響きだった。こちらを気遣ってくれているのがわかる。

私はただ首を振った。訳も分からないままただ首を振り続けた。

彼の温かい腕に、言葉にすがってはいけない。

彼は幻だ。所詮手には入らない幻。今だけ触れられる幻。

すがったら最後だ。私はますます、現実で生きていけなくなる。

後悔したくないと思う。

なのに私は今後悔の真っ最中だ。

あああの時、シグの隣に座らなければ良かったと。

そうすればこの「恋心」も、きっと凍らせる必要すらなかったの
に。

シグは私の肩を抱いたまま。私は膝を抱えて顔を上げないまま。

その日の夢は、それで終わった。

次の日。

白い夢は、いつもどおりだった。

いつもどおりの広さの白い部屋。五、六人座れるぐらいの大きさのソファ。そして窓。私は真ん中に座っていて、隣にシグがいた。

今は二人で読書中で、互いに話しかけはしない。けれど気まずい雰囲気でもない。

私と彼の間には、人が一人座るには少し狭いぐらいの隙間が開いていた。手を伸ばせば触れられる、でも伸ばさなければ触れられない距離。

保たなければいけない絶対の距離。

私は結局、彼には寄りかからなかった。ただ膝を抱え続けて朝が来て、目が覚めた。

起きたら涙がだばだば流れていて、見るも無残な赤い目とはれぼったいまぶたに苦笑した。

熱が出たと仕事を休んで、一日ぼんやりしていたらなんとか心が落ち着いてきた。

ずる休みなんて学生の時以来。何にもしないでただボーっとしているというのは存外人生に必要な時間なのかもしれない。

その証拠に、今までずっと張り詰めていた何かが、ゆっくりとほぐれていくような気がした。

大丈夫。

今の状態ならそう言える。
多分もう少し頑張れる。

夢の中のシグにすぎる事は、夢にすぎる事になる。
そうすれば、私はいつか現実を捨てるだろう。

でも捨てた所でどうなる？

所詮夢は夢でしかない。完全に夢の住人になるなど、それこそお伽噺だ。

結局現実から逃れられない自分に絶望して壊れるぐらいなら、最初からすげなければいい。手をとらなければいい。

私とシグの関係は、今の状態が一番いいのだ。

ただ隣に互いがいることを認めた状態。

これ以上望んでも絶望するだけだ。恋心がなくても、玉砕しても、結局私の結末は絶望でしかないのだ。

シグは私の現実にはいない。それはもう、確定的に明らかだった。だって彼は、子供さえ知っている世界の国の名前を知らない。変わりに彼が知っていた大陸や国は、まったく知らない名前ばかりだった。歴史の話も少ししたけれど、昔学校で習ったものにはかすりもしない英雄譚とお伽噺のオンパレードだった。宗教も、言語も、何もかも違うのだと分かった時点で、彼の知る現実とは、私の知る現実ではない事が分かった。

彼は私の願望が生み出した夢の産物などではなく、純粹に違う世界の人間だったのだ。

何故世界の違う人間が、同じ夢を見ているのか。

理由なんて分からない。原因ももちろんだ。

私達は互いの知らない世界を生きながら、夢で会う。話をする。笑いあう。

もうそれでいい。それ以上なんて望まない。

だから、と私は誰かに祈る。

もう少しの間だけ、この白い夢を私から奪わないでください、と。

いつも引き籠もって研究塔から出てこない友人が、熱心に蔵書塔に現れると聞いてきてみれば、件の友人は半ば本に埋もれるようにして何かを調べていた。

遠目から見ると本の山みたいに見えて、それが思い出したように動くと、少し暗がりのせいもあってやや不気味な光景だ。

どうせいつもの研究に関する資料だろう。

それにしても、もう少しまともな状況で読むことは出来ないのだろうか。

適当に切られた髪はぼさぼさで、上に紙くずがのつてる始末。こんなのが上司だと部下も大変だろうと、白の塔の魔法士達に何度目か分からない同情の念を送る。

今友人が研究しているのは召喚術についてだ。

異世界のモノを召喚する研究は、大分昔から行われてるにもかかわらず大した進歩はない。召喚術を扱えるだけの強大な魔力を有した魔法士がいなかったのが進展のなかった原因なのだが、今は数百年に一度の才能と謳われた友人が存在している。

伝説にある賢者にも匹敵する魔力と頭脳。

彼の元で必ず召喚術は完成するだろうと、魔法に関わる人間達は誰もがそう思ってるらしい。

が、にもかかわらず今まで何の進展もないのは、ひとえに友人のやる気のなさからだ。研究に集中している時はいいのだが、一

度集中力が切れるとまるで仕事をしないのだ。寝るか、本を読み漁るか。どっちにしる研究室に引き籠もつて外に出てこない。

一時期は茸でも生えてるんじゃないかと疑ったほどだ。

本を読み漁る友人は、一向にこちらに気がつかない。

もしかしたら扉から彼が入った事にすら気がついてないのかもしれない。

よくこんなのと二十年も友達やってられるよな、俺。

ちよつと誰かに自分を褒めてもらいたい瞬間だった。うん、帰ったら奥さんに褒めてもらおう。

「アデル、また飯食ってないんだって？」

こちらに気づくまで待つつもりだったが、飽きてさっさと声をかける。

元々そんなにこらえ性がある性質でもないのだ。

友人は彼の声にも反応せず、微動だにせず本を読む。…寝てるんじゃないのかこいつ。

「アデル！ シグウェル・アデーリー・アイブラーサ、聞こえてたら返事！」

嫌味をこめてフルネームで、すぐ近くで叫んでやるとようやく本の山がもそもそと動いた。ざんばらな前髪の奥から黄色い光がこちらを凝視している。睨まれても今更ひるむ彼でもない。

久方ぶりに見る友人は、相変わらずすごい有様だった。

ぼさぼさの髪に加えて無精ひげ。落ち窪んだ目に明らかに栄養が足りてなさそうな青白い肌。自分と同一年のはずなのにこれでは世捨て人の老人のようだ。

友人の養父が生きていた頃はもう少しまともな恰好だったはずなのだが。

「……何か」

不機嫌さも隠さず友人が呟く。大方、読書を邪魔されたのが気に食わないのだろう。

「何か、じゃねえよこの馬鹿！ あれほど飯だけは食えって言ったじゃねえか！ そのうち本も持ち上げられなくなるぞ！」

「……ちゃんと、食べた」

「四日前にか」

「……」

沈黙は肯定だ。

友人はそれの何がいけないのかと、ひるむことなく面倒くさそうにこちらを見上げている。

「そんなんでお前の生命活動維持できるわけねえだろ。人並みに食え。いや人並み以上に食え。あと髭それ。お前が俺と同年とか本当嘘じゃねえかと思うからとにかく剃れ。そんなんだから未だに嫁さんもこねえんだよ！」

噂と人づての話だけでこの友人に憧れて、白の塔に入った女性の魔法士は皆初対面で絶叫する。しかも女だろうが男だろうが容赦なくぞんざいに扱うのももちろん女性はよりつかない。

すぐに憧れだけで職に就いた女性はいなくなり、白の塔は騎士団以上にむさくるしい事になってるそうだ。

女性に興味があればもう少し変わるだろうに、友人は研究と書物と一握りの人間以外に興味がない。

その一握りであつた友人の育ての親が亡くなり、今では彼と数人しか、この友人に面と向かつて声をかけられる人間はいない。

思えば友人の育ての親だつたベルエスト老師が亡くなってから、元々引きこもり気味だつた生活がさらに酷くなつたのだ。

本当、何で死んだんですか老師。

どうしてこいつをもう少しまともな人間として更生しなかつたんですか。こいつの結婚関係の事頼まれましたけど、絶対無理です。多分こいつに一生結婚とか嫁さんとか望めませんって。

頼まれた当時は、少しは努力もした。彼の妻の女友達を紹介したが全て全滅。髭をそつてまともな格好をすれば普通に見られる容姿の癖に、彼はその性格でめばしい女性をあらかた敵にまわした。何せ女性に対する気遣いとかがないのだ。だめもとで友人の部下である白の塔の貴重な女性魔法士にも声をかけてみたが、結果は全力で拒否された。

「…髭があると、だめなのか」

「そりやおめえ、手入れしてるんならともかく伸ばし放題にほつたらかしてるだけだしよ。何よりお前の顔に髭は、全然似合わん。違和感だらけ………って、え？ お前今何つった？」

「…髭があるとだめなのかと言つた」

「……おま、その言い方だとなんか嫁欲しいみたいに聞こえるぞ？」

幻聴か。それとも栄養足りなさ過ぎてついに頭が壊れたか。
今まで友人がこの手の話に反応した事があつただろうか。答えは
否だ。いつもいつも鬱陶しそうな目で睨んで無視するだけである。

熱でもあるのかと本気で心配すると、友人はそんな彼を無視する
ようにその場に立ち上がった。

「…髭をそつてくる。ついでに食事と、水も。その本は後で研究室
に運ぶから、そのままにしておいて欲しい」

「お、おお…え、おい、アデル」

言うや否や、友人の行動は早かった。あっという間に蔵書塔の外
に消えたその後姿に、明日は嵐がくるかもしれねえと、彼は大きく
身震いした。

次の日も、次の日も。

私は何事もなくシグと白い夢をすごした。

距離を保ったまま、これまでどおりに。恋心など、最初からなかったように。

私の状態が元通りになる一方で、今度はシグの様子がおかしくなった。

急に黙り込んで、私をじっと見る事が多くなった。本を読んでいるときも、会話をしている時もだ。

いつものぼんやりした柔らかい黄色の目が、その時だけ僅かにゆらりと陽炎のように揺れるのが少し怖かった。

まるでシグじゃないようで。でも私が知っている彼の姿など、きつと数ある面の、たった一面に違いない。

声をかければ、彼は何事もなかったかのように笑う。笑ってなんでもないと言う。

そんな状態が数日続いたある日の白い夢。

彼はまた、本を読むのをやめて私をじっと見た。

なんだろう。こうまで続くと本当に気になる。

私は本から顔を上げて、ちらりと横を見る。目があってもひるむ事のない視線に、根負けした私が目をそらす。

じっと見られるのは落ち着かなく、原因が分からないから更に困惑するばかり。何か変な所でもあるのだろうか。それとも、知らない

うちに彼に何かやってしまったのか。

「シグ？」

いつものように、問いかけるように声をかけるとようやく視線が揺らいだ。

今の今までゆらりと炎のように揺れていた正体不明の影が瞳から消えて、いつものぼんやりとした光に戻る。

「ネイヴィス……なんでもない」

シグはやっぱりそう言って、私に向かってにっこりと笑う。

ネイヴィスというのは、シグの国の言葉で問題ないとか、何でもないとかいう意味の言葉だ。本来はネイヴィとイス、の二つの単語からなる言葉だけど、続けて言うとなんか私にはどうしてもネイヴィスに聞こえる。

我ながらヒアリングに弱い耳である。

シグがすぐに日本語で同じ意味の言葉を言ってくれるから、私のヒアリング能力は上達する気配がない。

この場での会話もすっかりと日本語で定着してしまった。

「セツ」

今度はシグが私を呼んだ。

何、と問いかけると彼は膝の上に置かれてるだけだった本を閉じて私に向き直った。

「そばにいても？」

「いいよ」

「グレーサ。ありがとう」

シグは律儀にお礼を言って、間に一人分だけあったスペースをゼロにした。

すぐ隣に座りなおした彼は、読書を再会するでもなくまた私を見してきた。といつても今度は私自身ではなく、読んでいる本を覗き込んでいる。

読む？と本を差し出すと、彼は少し躊躇した後受け取って、すぐに返してきた。やっぱりまだ本を読むのは無理だと笑って。

彼から本を受け取って、私はそういえばと彼の顔を見た。よくこの前髪で、本が読める事。目が悪くなったりしないのだろうか。

「シグ、前髪邪魔じゃない？」

「見えてる。大丈夫」

彼は長い前髪の奥でにこりと笑う。何がそんなに嬉しいのだろうかと思うほど、柔らかく。本当に？ともう一度問えば、大丈夫と同じ答えが返る。

前髪がなかったらこの笑顔も、もつとはつきり見えるんじゃないかと思うと少し残念だ。不満がうっかり顔に出たのか、シグはきよんとした顔で私を見る。「セツ？」不思議そうな、どこか不安そうな声に、何故だか悪戯心を刺激される。

彼を見上げて、今度は私がつこりと笑った。

夢の中とは本当に便利なものだ。少し考えただけですぐに手元に現れたヘアピン数本を、私は無言で彼の前に差し出した。

「…?」

首をかしげたシグに、私は一本を自分の前髪にとめてみせる。それだけでこちらの意図を理解したのか、彼は少し逃げ腰になった。

「シグ」

じりじりと、後退する彼を追い詰めるように名前を呼ぶ。
うん、何か異様に楽しい。思えばこうしてふざけるのは初めてのことじゃなかるうか。

「セ、セツ?」

「じつとしてて、すぐ終わるから」

「セツ、だ、大丈夫だから」

「うん。そうだけどね」

「!」

シグが何か叫ぶ。オーレセなんとかとかきこえたけど、生憎教えてもらった言葉じゃないので私には分からない。
じりじり。じりじり。

ついにシグの背中ソファアの端にあたる。

「シグの顔、ちゃんとはつきり見てみたいから」
「え?」

彼の動きが止まった、一瞬だった。その一瞬で勝負をつけた私は、彼の前髪を見事ヘアピンで留めることに成功した。

赤い花飾りのついたヘアピンは、予想外に似合っていた。

ぎゅっと目をつぶったシグが、恐る恐る目を開けて私を見る。

一方の私は、私は…。

自分がとんでもない事をしてしまった事に、今更ながらに気がついた。

邪魔な前髪がとめられて、半分だけはつきりしたシグの顔。

いつもぼんやりと見えていた黄色い光が、今ははつきりと見えた。ついでに長い睫毛も。更についでに、予想外に端正なその顔の造詣も。

ドクンと、心臓がありえないほど大きく高鳴った。

いや、いや、いや、まってまって私の心臓。

別に顔で好きになったわけじゃないんだけど、何でこんなに高鳴るの、何でこんなに顔に熱が、熱が、熱がつ！

馬鹿か私。本当に馬鹿だ。馬鹿すぎて涙が出る。本当に馬鹿だ馬鹿大馬鹿。

せっかくおさまった熱を、状態を、蒸し返してどうする。本当どうする。

高鳴る心臓、顔に集まる熱。シグに触れた手まで震えてきそう。私はあせった。心底あせった。呼吸まで苦しくなったような気がして、思わず胸元の服をぎゅっと握った。

本当にここは夢の中なんだろうか。

この胸の高鳴りも、熱も、息苦しさも、何もかもがリアルで叫びだしてしまいそうだと言うのに。

状態変化に対応できなず、うろたえる私を見てシグが瞬く。なんでもないとすぐに言えばよかったのに、言葉はちっとも出てこない。急激に挙動不審になったまま、夢の時間は一秒、二秒と過ぎていく。

シグは何も言わないまま、不自然な私をじっと見つめる。まるで何かを探るように思えたのは、気のせいなのか。

「い、ごめんなさい」

ようやく搾り出した言葉はそれだった。

「ちょっと、シグに悪戯、してみたくて」

自分の今の状態を誤魔化すためなら何だって素直に言えた。

「い、ごめんなさい」

そうまた言うと、シグは一瞬だけ目を伏せて、そして笑った。でもそれは、いつもの柔らかい微笑じゃない。

私が恐れた、あの陽炎のような影を含んだ、微笑み。

「。。。。」

「え？」

彼が何かを話す。いつもと違って長い言葉は、やっぱりうまく聞き取れない。それに聞き取れた単語も意味の分からないものばかり。

いつものシグなら、その後には必ず日本語で意味の近い言葉を繰り返してくれた。

でも今の彼はどうしてかそれをしてくれない。代わりに自分の前髪につけられたヘアピンを引き抜いて、私の前髪にそっとつけなおした。

再びシグの顔は前髪で隠れて、その瞳に浮かんだ陽炎も消える。

ほっと安心したのも束の間、彼は私の空いてるほうの手をそっと握ると、

「っ?！」

私の額にキスをした。

* * *

気がつけば飛びおきていて、部屋の中は薄明るかった。

見慣れた壁と慣れ親しんだ家具。脱ぎっぱなしの洋服。

窓の外から聞こえる鳥の声は、お伽噺のようにはつきりとしていた。

朝だ。止めていた息をようやくふつと吐き出した。

やっぱりいつもの夢だった。

ほっとしたような残念だったような、複雑な心境のままどっと噴出した汗をぬぐう。

顔が熱い。
額に触れた唇の感触が、まるでまだ残っているような気さえする。
あれは現実じゃない。そうわかっているのに。

悪戯のお返し、そうシグが言った所で目が覚めた。
倍返しされた気分だった。今の私には大ダメージを受けたにも等しい。

はたして次の夢でも、何事もなかったように普通にふるまえるのか私。

このままだと近づいただけで赤面してしまいそうだ。

未だ治まる気配を見せない心臓の音と熱。

ああ、なんて心臓に悪い夢。

「…アデル」

深刻な顔をして、邪魔者がまた部屋にやってきた。

彼はそちらをチラリと一瞥しただけで、すぐに目の前の作業に戻る。

毎度毎度よく来る事だ。騎士とはそんなに暇な職業だったろうかと疑問に思ってしまうほどだ。

邪魔者は、彼にとっては数少ない友人の一人だった。何かと煩く面倒を見てくれたり小言を言ってくる、まあ鬱陶しいがかけがえのない友人だ。

だからこそ、今ものすごく邪魔者なのだ。

彼は早くこの研究を完成させたかった。

それはもちろん、王国の権威のためでも、今後の魔法の発展のためでも、偉人達の悲願のためでもない。

ただ彼の目的のためだけに完成させなければならなかった。大雑把なものではなく、より繊細に、精密に。そして最高の完成度を彼は求めた。そうでなくてはならない理由があった。万が一にもほころびがあつてはならない。そんな事は許されない。

時間は無限ではなく、時は常に流れ続ける。だからこそ迅速に、そして完璧に。

「お前、本っ当に大丈夫か？」

「用がないなら帰れ」

顔を上げないままずばりとそう言いはなてば、友人は憤慨したように雄たけびを上げた。凄く煩い。

「おまつ、人が心配してやってんのにその態度ってどうよ?!」

「生憎食事も睡眠もとってる。以前より体調がいいくらいだ」

「いやいやいや、だからだつつうの」

「訳が分からない」

あれほど人に生活態度を改めろと言っておいて、いざその通りにしたら「大丈夫か」とは何事か。

「…この十数年、何べん言っても生活態度を改めなかったお前が、この間から別人みたいな有様だ！ 正直悪いモンでも食べたか脳みそがいかれたとしか考えられグブオツ?!」

無造作に投げた分厚い魔法書はうまい具合に友人にぶつかっただけ。内容は大して役に立たないものだったが物理的に役に立った。耳障りな悲鳴と共に巨体が倒れる音が部屋に響いた。長年掃除していない部屋だけに、その衝撃で埃とくずかごに入り損ねた紙が宙を舞う。

まったくいるだけで邪魔なのに更に邪魔になるとは、友人でなかったら塔の外に捨ててやりたい所業である。

とりあえず後でこの部屋の片づけを手伝わせよう。

思えば部屋の片付けなんて、養父が生きていた頃以来だと思つと何だか懐かしい。

養父も片づけが得意な方ではなかったから、研究室も屋敷の自室

も、いつも様々な本と器具で埋め尽くされていた。
その中に埋もれるように、よく徹夜で魔法理論を教わった。

その養父が亡くなってからは、彼の中にぽっかりと穴があいたような気分だった。

あるはずの大事なものがない。そんな消失感。

実の親の顔などとうに覚えていない。

彼にとって世界は養父と魔法だけで形成されていたし、それで不満も何もなかった。

いつまでもそのまま変わらないと思っていた。けれど時は流れて、彼の世界の半分は輪廻の輪へと旅立った。

失われて変わった彼の世界。亡くなった養父の代わりなど存在しない。それは彼にもよくわかっていた。

養父が好きだった。いなくなって初めてそう思った。生きてる頃は彼を「父」とは呼ばなかったのに、死んで初めて「父」と呼んだ。叫んだ。無性に会いたくて仕方なかった。

自分の中にぽっかりと開いた穴が、消失感が。悲しみなんだと気がついた時には、生まれて初めて涙を流した。もう会えない養父を思った。誰にも会いたくなくて、心配して様子を見に来てくれたいた友人を無下に追い払った。部屋に閉じこもって一歩も外に出なかった。

それなのに矛盾したように誰かに傍にいて欲しいと思った。

慰めの言葉も気休めの言葉も何もかも要らなかった。ただ傍にいてくれるだけの誰かが、欲しかった。

「彼女」の存在を強く認識したのは、そんな時だった。

自分が時より見る夢の中に、誰かがいるのは知っていた。いつも同じ人間で、それが女性である事も知っていた。知っていたがそれだけだった。彼はその存在に興味がなく、どうしてそんな夢を見るのかさえどうでもよかった。彼女も彼には興味がなかった。

ただ互いに同じ夢の中に存在する、それだけの事。違和感などまるで感じない。

不思議だったのは、現実では不精な自分が夢の中では身綺麗な恰好をしていた、たったそれだけ。

彼女は長椅子のすみで本を読み、彼もまた同じだった。

白い部屋に長椅子、そして彼と彼女、本。
幾度繰り返しても夢は同じ。

しかし彼が「誰か」の存在を求めた時に、夢は変わった。あの時傍にあった体温の暖かさを、彼は今も忘れない。彼の世界に、新たな存在が飛び込んできた瞬間でもあったからだ。

彼女の存在を認識する事で、彼にとって白い夢の価値は変わった。夢の中でしか会えないだけに、それ以降自分が徹夜をする回数もぐんと減った。

夢の時間はかけがえのないものになり、現実に戻りたくないと思つた事すらあった。

自分の変わりようは、傍から見れば滑稽なだけだろう。彼だって今更、養父を思う以上に大事な存在が出来るなんて思っても見なかった。

夢の中で会話を繰り返せば繰り返すほど、彼女の存在は自分の中で大きくなっていった。

もう彼女の存在をまったく気にしていなかった以前の様には戻れないし、戻りたくもない。

夢の中という、曖昧な彼女の存在。

それを確かなものにするためにも、この魔法を完成させなければならぬ。綻びもなく完璧に。

「……だああああっ、てめっ、アデルこの野郎！！ 人に向かって凶器投げんじゃねえ！！ お前の細腕のどこにこんな重い本ぶん投げる力があるんだよ！！」

「ヨウン、煩い。邪魔だからとっとと仕事にもどれ」

復活した友人の叫びに、また場が騒がしくなる。

せつかく「彼女」の事を思い出していたというのに、むさくるしい友人の怒鳴り声で台無しだ。

ああ邪魔だ。本当に邪魔だ。心底邪魔だ。

文句をまくし立てる友人をさらりと無視して傍にあった別の魔法書を手に取った。厚さは先ほど投げたものよりややページ数が多く、ずりりと重い。内容には既に用がないので、手元から離れてしまっても問題ない。

よし、これで今度こそ静かになるか。

期待をもって放り投げたそれは、寸分たがわず目的に激突し、彼の願いを短い時間だが確かに叶えてくれたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1292r/>

白い夢

2011年11月16日19時08分発行